

柚ノ木A遺跡

柚ノ木A遺跡

2次調査

福岡県春日市岡本所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書 第50集

春日市文化財調査報告書 第50集

春日市教育委員会

2007

春日市教育委員会

柚ノ木A遺跡

2次調査

福岡県春日市岡本所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書 第50集

序

春日市は玄界灘に面した福岡平野の南奥に位置し、昭和50年代以降、福岡都市圏のベッドタウンとして発展してきました。市内には古くから遺跡が多く存在することが知られており、開発の前に発掘調査を行い、すでに消滅した遺跡も多くあります。こうした中でも重要な遺跡については国指定史跡として、日拝塚古墳、天神山・大土居水城、須玖岡本遺跡などは整備・保存を進めてきたところです。

今回報告する袖ノ木A遺跡は、中国の歴史書「三国志」東夷伝に記述がみえる奴国を中心とする、須玖遺跡群の一角に位置します。調査面積は広くありませんでしたが、古墳時代の朝鮮半島との文化交流を推測させる資料が出土しました。十分な調査・報告ではありませんが、本報告書を広く活用していただけましたら幸いです。

発掘調査は個人専用住宅の建替えに伴い、国県の補助金を受けて行ったものです。調査にあたっては地権者のご理解・ご協力を賜り、深甚の謝意を申し上げます。また、発掘調査・整理に際しては、多くの方からご指導賜りました。末筆ながら感謝申し上げます。

平成19年3月31日

春日市教育委員会

教育長 山 本 直 俊

例　言

- 1 本書は平成12年度に発掘調査を行った、袖ノ木A遺跡2次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は国県補助金により、春日市教育委員会が実施した。
- 3 遺構の実測は境靖紀が行い、図面の整理ならびに浄書は池田由紀、牧平佳恵が行った。
- 4 遺物の実測は境、吉田浩之、末田敬子、吉富千春が行い、浄書は境と坂本陽子が分担して行った。
- 5 遺構写真是境が、全景写真是垣睦夫氏（有限会社空中写真企画）が、遺物写真是岡紀久夫氏（文化財写真工房）が撮影した。
- 6 本書に掲載した鉄製品の保存処理は、比佐陽一郎氏（福岡市埋蔵文化財センター）の協力を得た。
- 7 本書に使用した地形図は国土地理院発行の1/25000地形図『福岡南部』である。
- 8 本書では磁北を使用した。
- 9 本書の執筆は境と吉田で分担し、編集は境が行った。
- 10 出土した遺物、本書に掲載した図面、写真是春日市奴国の丘歴史資料館にて保管している。
- 11 遺跡名は調査当初「袖ノ木遺跡 2次調査」としていたが、平成14年度に周知の埋蔵文化財包蔵地の整理を行い、「袖ノ木A遺跡 2次調査」に変更した。

遺構・遺物について下記の方々にご教示賜りました。記して感謝申し上げます。

岡田裕之（大野城市教育委員会）、小田富士雄（福岡大学名誉教授）、亀田修一（岡山理科大学）、
武末純一（福岡大学）、舟山良一（大野城市教育委員会）、桃崎祐輔（福岡大学）、敬称略

本文目次

I	はじめに	1
1	調査にいたる経過	1
2	調査の組織	1
II	立地と環境	2
III	調査の内容	5
1	調査の概要	5
2	遺構と遺物	7
①	1号竪穴住居跡	7
②	2号竪穴住居跡	15
③	3号竪穴住居跡	16
④	包含層	16
IV	まとめ	23

図版目次

図版I	（1） 調査区北半（西より）	
—	（2） 調査区南半	
2	（1） 1号竪穴住居跡完掘状態（西より）	
—	（2） 1号竪穴住居跡主柱穴位置関係（西より）	
3	（1） 1号竪穴住居跡竈検出状態（東より）	
—	（2） 1号竪穴住居跡竈袖半裁状態（北より）	
—	（3） 1号竪穴住居跡竈袖除去後の遺物出土状態	
4	（1） 1号竪穴住居跡P6土器出土状態（西より）	
—	（2） 隈出土状態（東より）	
—	（3） 西側屋内周溝遺物出土状態（東より）	
—	（4） 須恵器（陶質土器）出土状態（東より）	
5	（1） 1号竪穴住居跡東側土器出土状態（西より）	
—	（2） 1号竪穴住居跡東側土器出土状態（北西より）	
6	（1） 1号竪穴住居跡竈西側土層①（北より）	
—	（2） 1号竪穴住居跡竈西側土層②（北より）	
7	（1） 調査区西壁土層（東より）	

- (2) 包含層 土器群A・B出土状態

- 8 1号竪穴住居跡出土須恵器(陶質土器)・土師器
9 1号住居跡出土土師器・手捏土器・鉄製品・玉類・石製品
10 包含層出土弥生土器・鉄製品・瓦・石製品
11 包含層出土鋳型

挿図目次

第1図	柚ノ木A遺跡周辺遺跡分布図(1/25000)	3
第2図	柚ノ木A遺跡位置図(1/2500)	4
第3図	柚ノ木A遺跡2次調査構造配置図(1/100)	6
第4図	1号竪穴住居跡実測図(1/60)	8
第5図	電査測図(1/40)	9
第6図	1号竪穴住居跡出土須恵器(陶質土器)実測図(1/3)	9
第7図	1号竪穴住居跡出土土師器実測図①(1/3)	11
第8図	1号竪穴住居跡出土土師器実測図②(1/3)	12
第9図	1号竪穴住居跡出土土師器実測図③(1/3)	13
第10図	1号竪穴住居跡出土鉄製品・玉類・石製品実測図(1/2・1/1)	14
第11図	2号竪穴住居跡実測図(1/40)	15
第12図	2号竪穴住居跡・土坑出土遺物実測図(1/4)	15
第13図	3号竪穴住居跡実測図(1/40)	16
第14図	調査区西壁土層実測図(1/40)	16
第15図	包含層出土弥生土器実測図①(1/4)	17
第16図	包含層出土弥生土器実測図②(1/4)	18
第17図	包含層出土弥生土器実測図③(1/4)	19
第18図	包含層出土土師器・瓦実測図(1/3)	21
第19図	包含層出土石製品・鉄製品実測図(1/2)	22
第20図	包含層出土石製鋳型実測図(1/2)	22
第21図	朝鮮半島出土百濟系陶質土器・軟質土器(1/3)	25

I はじめに

1 調査にいたる経過

2000（平成12）年度に春日市岡本4丁目99番地にて、個人専用住宅建設の協議が持ち込まれた。西接する隣地では1999（平成11）年度に発掘調査を行い、弥生時代中期から後期の住居跡等が確認され、当地は遺構が残存していると予測されたため、事前に試掘調査は行わず、発掘調査を実施することとなった。なお、発掘調査にあたっては国県補助金を受けた。

2 調査の組織

発掘調査および整理作業における春日市教育委員会の体制は下記の通りである。

平成11年度（発掘調査）		平成18年度（整理作業）	
総括	春日市教育委員会 教育長 河鍋 好一	教育長	山本 直俊
教育部長	岡本 嘉彦	社会教育部長	鬼倉 芳丸
文化財課長	鬼倉 芳丸	文化財課長	結城 保雄
管理担当係長	古賀 俊光	管理担当係長	戸渡 隆
事務主査	北島 公則（～6月）	事務主査	柚木 泰
"	白水富士子（7月～）	"	塙足 雅弘
文化財担当係長	丸山 康晴	文化財担当係長	丸山 康晴
技術主査	平田 定幸	技術主査	中村 昇平
"	中村 昇平	"	吉田 佳広
技術主任	吉田 佳広	"	森井千賀子
"	森井千賀子	技術主任	境 靖紀
"	境 靖紀	"	井上 義也（～6月）
嘱託	井上 義也	嘱託	吉田 浩之
"	池田 正大	"	長谷部真弓

発掘作業員：有馬傳、稻永正子、江藤晴美、大串博子、鳥山恵子、久保山弓子、久富悦子、日高芳子、八尋節子、多田峰子

整理作業員：伊藤千波、池田由紀、柏木朋子、坂本陽子、柴田悦子、末田敬子、須崎葉津子、富田恵子、西田明美、野田純代、堀川直美、牧平佳恵、安永みい子、吉富千春

II 立地と環境

袖ノ木A遺跡、福岡平野の南部に位置する牛頭山系から派生した春日丘陵上に位置する。

春日市内で、旧石器時代の遺物は須玖岡本遺跡の周辺や、赤井手遺跡、大谷遺跡、門田遺跡などでみられる。縄文時代は原遺跡・柏田遺跡・百堂遺跡で住居跡や石組造構が確認され、門田遺跡では草創期の爪形文土器が出土したことが特筆される。

縄文時代晩期と弥生時代早期の時代区分については論議され、意見が分かれているが、春日丘陵周辺低地からは水田を覆う洪沢砂から夜臼式土器や、水路から山ノ寺式に並行する深鉢形土器が出土し、水田が営まれている可能性が想定される。また、丘陵上には夜臼期の土坑墓や木棺墓が伯玄社遺跡で確認され、船載とみられる有茎磨製石器が副葬されていた。伯玄社遺跡から東に約1kmに位置する雜船隈遺跡第15次調査でも、夜臼期の木棺墓から供獻土器とともに船載の磨製石剣・磨製石器が出土している。

春日丘陵は奴国王墓として知られる須玖岡本遺跡をはじめ、弥生時代中期前半から後期終末前後までの遺構が密集し、須玖遺跡群とも呼ばれる。この遺跡群は丘陵北側低地に、青銅器鑄造工房である須玖岡本遺跡（坂本地區）・須玖永田A遺跡・須玖黒田遺跡、ガラス工房である須玖五反田遺跡、鐵器工房の可能性がある須玖唐梨遺跡が所在する。また、丘陵上にも鐵器工房である赤井手遺跡・仁王手A遺跡、青銅器鑄造工房の可能性がある大南B遺跡なども所在する。墳墓では中期後半に須玖岡本遺跡（岡本地區）で王墓・王族墓が築かれ、後期にも後漢鏡を副葬していた墳墓が須玖岡本遺跡だけでなく、松添遺跡・宮の下遺跡・立石遺跡でもみられ、階級分化が進んでいたことがうかがえる。

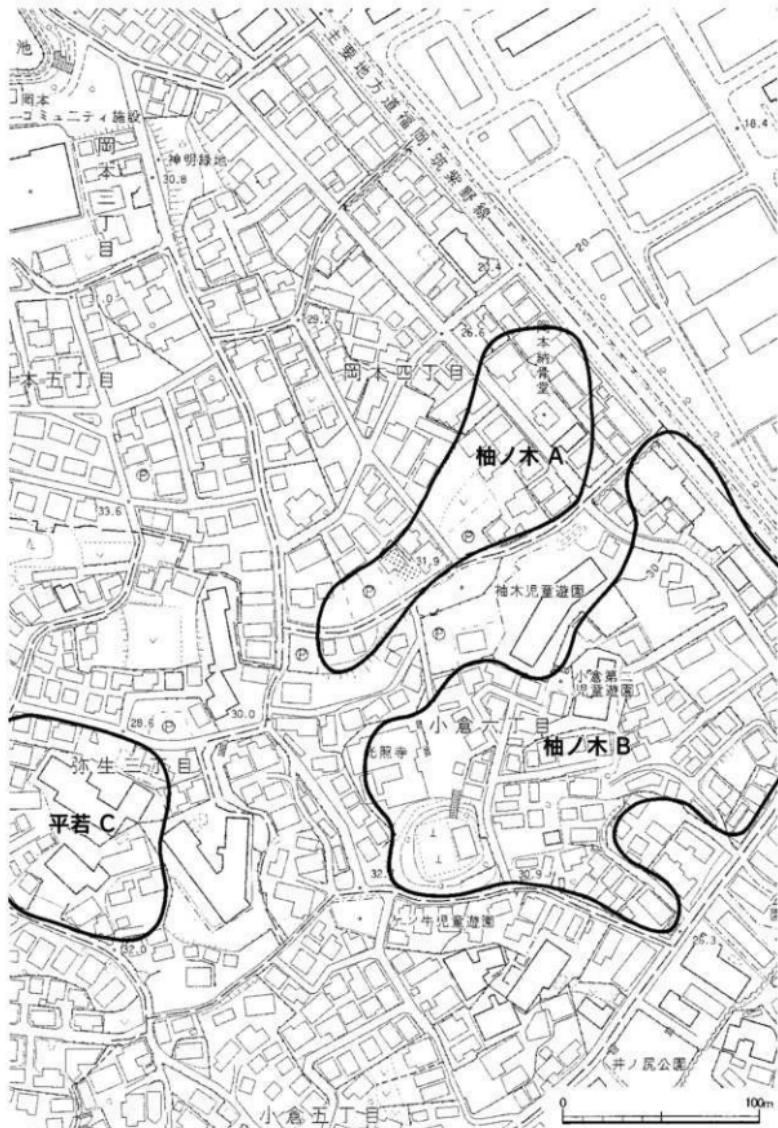
古墳時代初頭ころまで春日丘陵低地の工房群は活動しており、須玖唐梨遺跡では鍛造薄片などが出土しており、鐵器生産は継続している。この時期の集落は西隣の台地に位置する御陵遺跡や川久保B遺跡などがあげられる。5世紀になると市内では赤井手古墳、豆塚山古墳、一の谷古墳群で円墳が造営され、野藤古墳で円筒埴輪をもつた前方後円墳が築造される。6世紀には日拝塚古墳や下白水大塚古墳など前方後円墳が築造される一方、平野南奥の觀音山麓一帯には群集墳が多く築造される。なお牛頭山一帯で窯跡群が多くなるのも、6世紀頃以降である。

7世紀後半になると663年の白村江敗戦に伴い、水城が築造されたことが日本書紀に記されており、春日市内では天神山、大土居、小倉、春日で小水城が築造された。また、水城築堤前後には牛頭山から派生した小丘陵西斜面に位置するウトグチB遺跡で、九州最古段階の瓦窯が築窯された。この窯では軒瓦のほか鬼板や鶴尾などが焼成されており、近隣に所在した寺院に供給することを目的としていたと推測される。



- | | | | | |
|----------|----------|------------|------------|--------------|
| 1 御陵遺跡 | 2 野藤古墳 | 3 須玖唐梨遺跡 | 4 須玖水田A遺跡 | 5 須玖岡本遺跡（王墓） |
| 6 柚ノ木A遺跡 | 7 平若C遺跡 | 8 赤井手古墳 | 9 竹ヶ本C遺跡 | 10 伯玄社遺跡 |
| 11 豆塚山古墳 | 12 宮の下遺跡 | 13 一の谷古墳群 | 14 下白水大塚古墳 | 15 日拝塚古墳 |
| 16 天神山水城 | 17 大土居水城 | 18 ウトグチ瓦窯跡 | | |

第1図 柚ノ木A遺跡周辺遺跡分布図 (1/25000)



第2図 柚ノ木A遺跡位置図 (1/2500)

III 調査の内容

1 調査の概要

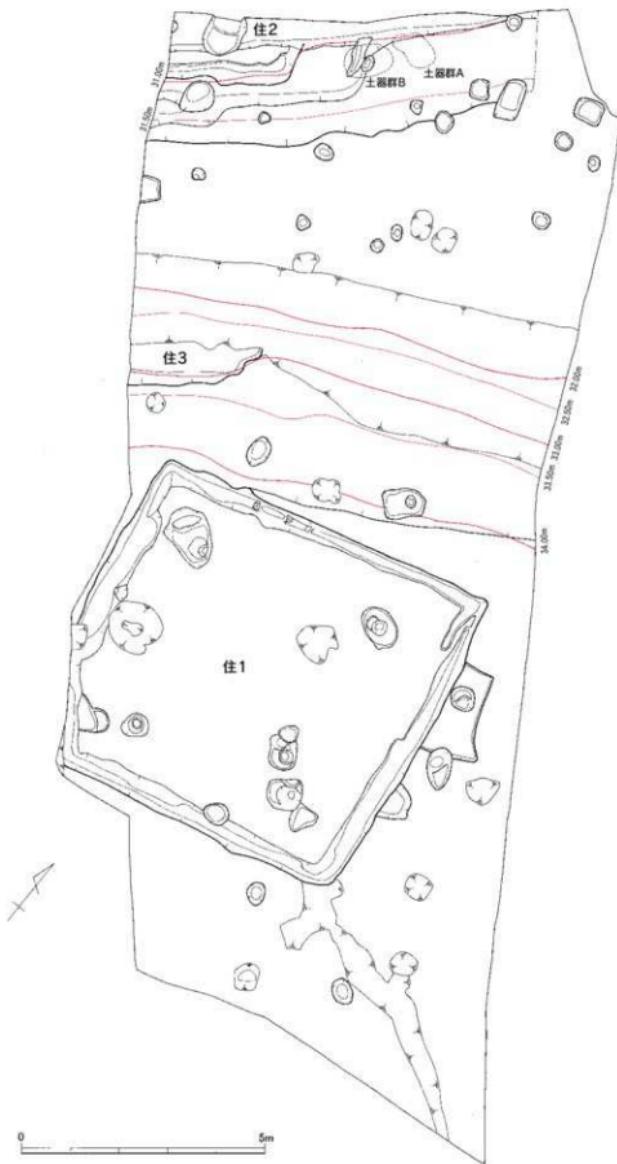
個人専用住宅建設の連絡を受け、事前協議を行い、西隣の1次調査では弥生時代の竪穴住居跡などが検出されており、地形が連続していることから遺構が残っていることが予測された。そこで、事前に試掘調査を行わず本調査を実施することとした。

調査面積は171.80m²で、対象地の約半分は北側の斜面となっていた。発掘調査は北側斜面に遺物が埋蔵された包含層が形成されていると予測されたので、斜面部から実施した。周辺には広形鉄矛が埋納された岡本ノ辻遺跡があるため、当地でも埋納坑が存在するのではないかと考え、遺構検出を慎重に行なったが、それらしき遺構は確認できなかった。

北端から重機で表土を除去していると、表土下に造成でマサ土が盛られていたことから、当地はある時点で北側斜面を造成し、調査区中央付近に平坦面ができたと考えられる。よって、純粹な遺物包含層は調査区北端付近のみである。この包含層の上層には布目を残した平瓦片や、古墳時代の土師器が含まれていたが、下層は弥生時代中期後半～後期後半にかけての遺物であった。

対象地北半を調査した後、南半の丘陵部の調査を行なった。南半はほぼ平坦となっており、遺構検出を行なったところ、住居跡1軒とピット数基が確認された。竪穴住居跡は1辺が5mを越えることから、複数の竪穴住居跡が切り合っているのではないかと考え、精査したが切り合い関係は認められなかつた。竪穴住居跡の掘削を始めたところ、須恵器や土師器が多数出土し始め、覆土が硬くなったところが貼り床ではないかと考え、その面で柱穴などの検出を試みた。主柱穴は4つ以上確認され、屋内周溝がほぼ全周し、西側に竈が取り付くことが確認できた。しかし、竈には煙道がなかつたので、屋内周溝との先後関係を平面と土層で観察してみたが、明確な切り合い関係はなかつた。また、屋内周溝には炭化物小片が散見されたため、竈と屋内周溝が連結する可能性を想定し、武末純一氏（福岡大学）にオンドルの可能性について現地指導を仰いだが、オンドルと断言することはできないという結論に達した。

1号竪穴住居跡から出土した遺物に、朝鮮半島系らしき遺物が含まれていることが整理段階で明らかになった。春日丘陵上で当地以外にも、竹ヶ本C遺跡の竪穴住居跡内から、舶載品の断面台形鉄斧が1点出土しており、5世紀代の朝鮮半島との交流も注目される。



第3図 柚ノ木A遺跡2次調査遺構配置図 (1/100)

2 遺構と遺物

① 1号堅穴住居跡 (図版2~5-(2)、第4、5図)

調査区のほぼ中央付近、地形が北西側へ傾斜する地形変換地点付近で検出した。平面プランを検出するために、調査区を西側に拡張したが、住居跡の南隅を検出することができなかつた。平面形は方形で、南北は6.78m、東西は7.55mをはかり、西側に竈を1基設けていたが、煙道の張り出しが確認できなかつた。

掘削時に貼り床の有無を考慮していたので、硬さが変わった第3層目で、一度掘削を止め柱穴や屋内周溝などの検出に努めた。住居の深さは検出面から床面まで、南側で25cm、北側で7cmをはかり、北側は地形とともに考えると削平されている可能性が考えられる。住居跡中央の南北土層をみると、屋内周溝は床面と想定される第3層の上から掘り込まれており、最終床面が硬くなかったことから見落とした可能性がある。

貼り床の上面で主柱穴を検出したが、南東隅では床面から深さ50~60cmのピットを3基確認したが、平面的な位置関係から、この住居跡に伴う柱穴の可能性は低いと考える。また、貼り床の下層でも別の柱穴を確認したので、数回の建替があったと考えられる。貼り床の下層で検出した柱穴P6の床面では土師器の椀が完形品で出土し、土層観察では柱痕の下になるので、祭祀の可能性がある。柱穴の深さはP1が56cm、P2が54cm、P3が58cm、P4が54cmをはかり、柱間はP1-P3間が3.7m、P2-P4間が3.85mをはかる。幅30cm前後の屋内周溝は、住居跡内で全周し、北隅で互い違いになっていた。竈は屋内周溝の内側で検出したことから、両者の前後関係を把握することに努めたが、平面と土層の観察からは前後関係をつかめなかつた。ただ竈西側の屋内周溝では炭化物が混じっていたので、竈と屋内周溝が繋がっていた可能性を考えている。

竈は攪乱のため著しく破壊されており、片側の袖と焼成部を検出するにとどまった。本来は「U」字形とみられるが、北側袖の基底部のみしか検出できなかつた。袖は白色の粘土で作られており、竈内床面と袖の基底部付近内面が橙褐色に焼けている。竈の中に支脚になるような河原石や土器ではなく、袖を除去すると下からミニチュア土器が出土した。

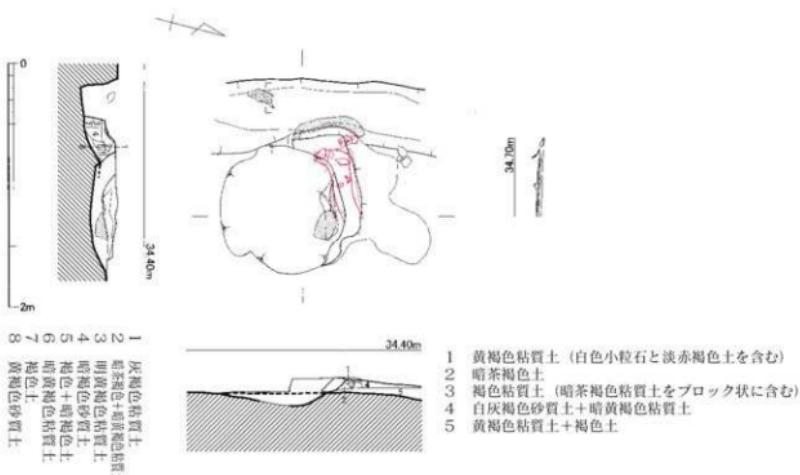
床面北東隅で炭化物が混じった焼土が広がっていたので、半裁したが1cmほどの厚さしかなく、性格についてはわからない。

遺物は覆土内から多く出土し、須恵器は全て覆土内出土で、床面から10cmほど浮いて出土した。土師器の甕が完形品で出土しているが(図版4-(2))、これは屋内周溝西隅付近の床面で、口縁部が天に向いた状態で出土した。東壁の中央では土師器が流れ込むように出土したので(図版5)、廃棄したものと考えられる。

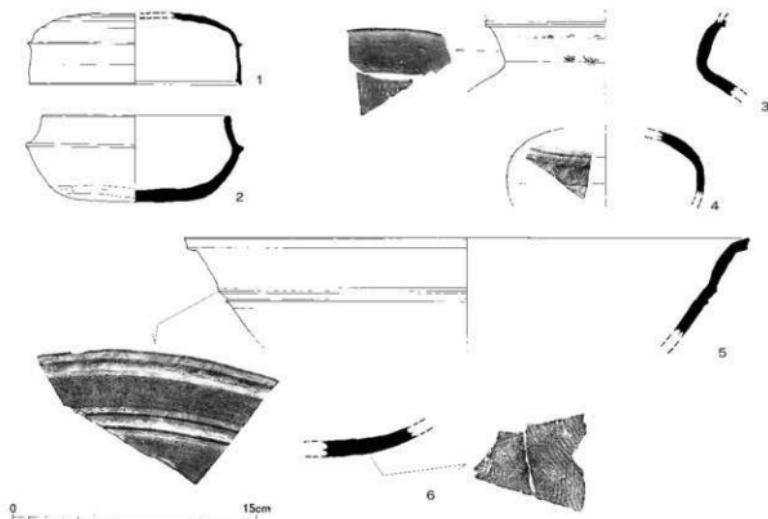
出土遺物 (図版8・9、第6~10図)



第4図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第5図 穴実測図 (1/40)



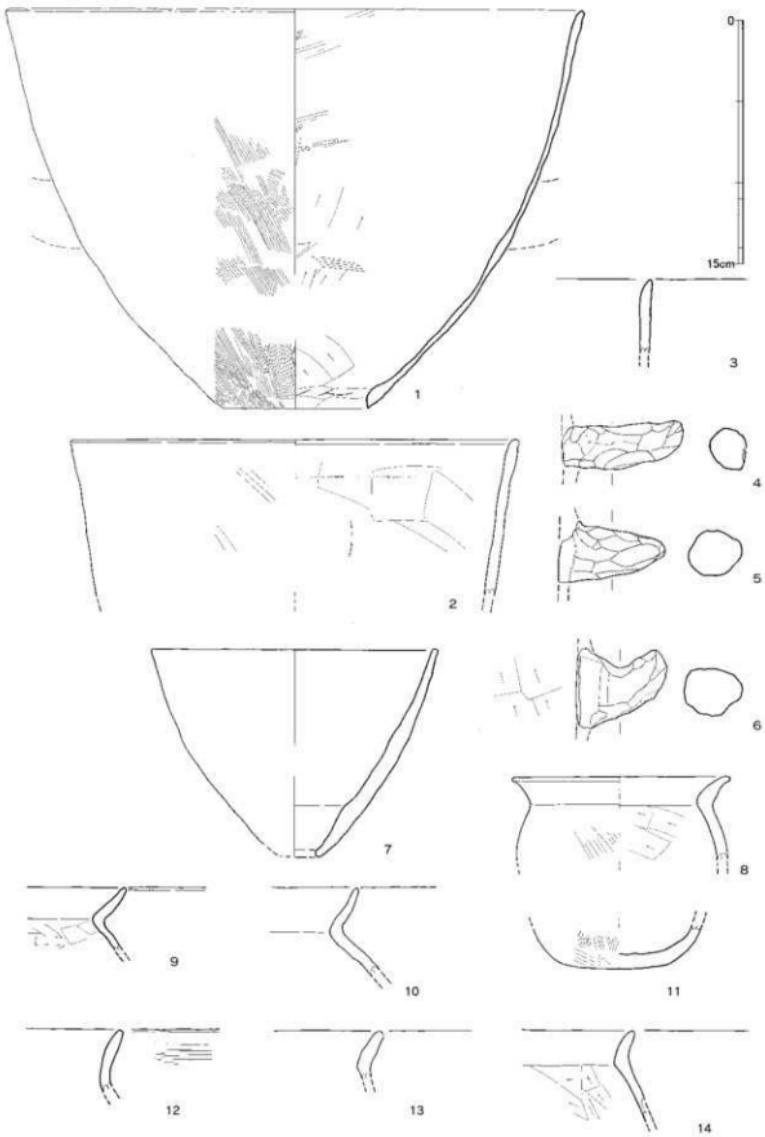
第6図 1号竖穴住居跡出土須恵器 (陶質土器) 実測図 (1/3)

a 須恵器（陶質土器）（図版8、第6図）

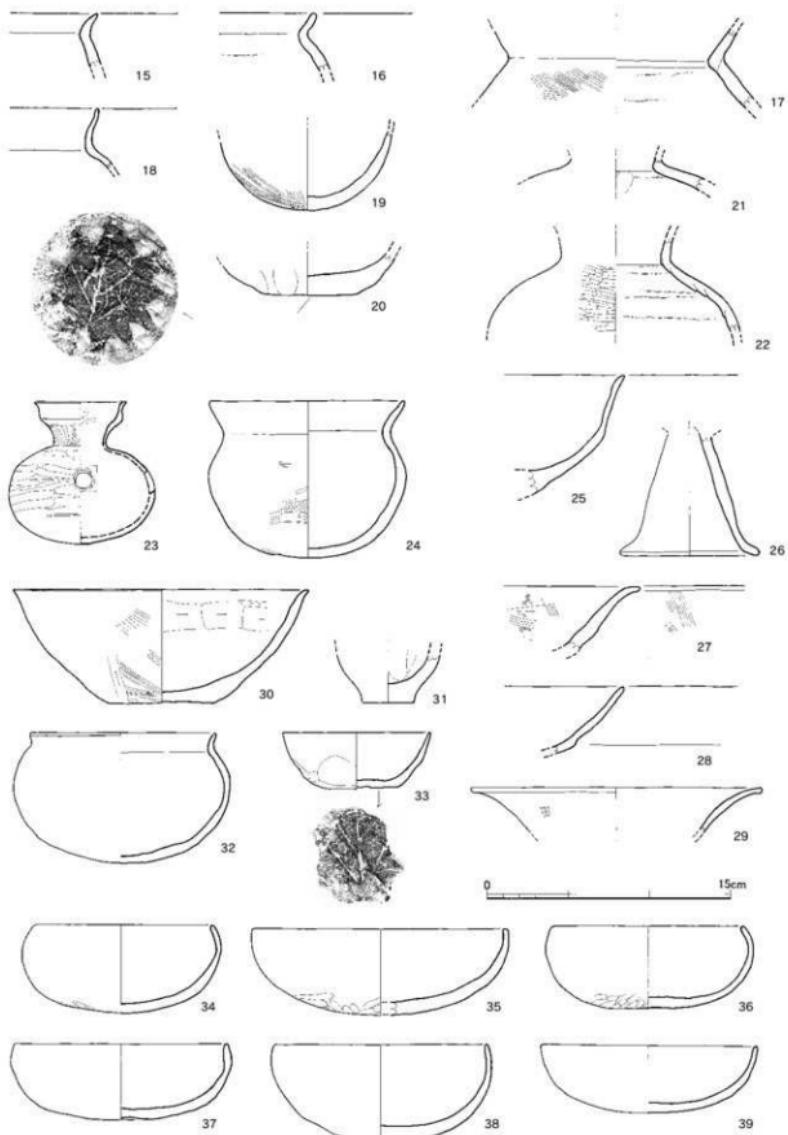
1は杯蓋片で復元口径13.0cm、器高4.5cmをはかり、色調は青灰色を呈す。2層中から出土した。2は完形品で、口径11.6cm、器高5.3cmをはかる。外面は部分的に手持ちヘラ削りを施している。色調は淡黄灰色を呈す。住居跡のほぼ中央付近で、口縁部が床面を向き、床面から10cmほど離れた状態で出土した。この土器については、受部幅は狭く須恵器に類例が管見に入らなかつたが、百濟地方の陶質土器の可能性がある。しかし、焼成が甘いことなど、陶質土器とするにも躊躇する。そのためここでは須恵器（陶質土器）としておき、系譜については後述したい。3は壺片で頸部に波状文を施した後、カキメ状の調整を施しており、青灰色を呈す。肩部に平行タタキがみられる。4は壺片である。小片のため孔は確認できない。胴部に波状文を施し、青灰色を呈す。住居跡北西部付近の3～4層中の出土。5は器台口縁片で、復元口径34.6cmをはかる。傾きからみて、内法は深くない。焼成はよく、胴部に波状文を施し、青灰色を呈す。住居跡北西部付近の1～2層中の出土。6は甕ないし壺の底部片で、外面に平行タタキ、内面にナデ消した當て具痕が見られる。3～4層中からの出土。

b 土師器（図版8・9、第7～9図）

1～3は壺である。1はおおよそ半分ほどの残存で、把手部分は残っていなかつた。復元口径で35.6cm、器高24.5cmである。外面はハケメ、内面はヘラケズリ、口縁部はヨコナテを施す。黄褐色を呈し、胎土には砂粒をほとんど含んでいない。住居跡東壁中央の土器集中部から出土した8片が接合している。2は復元口径で27.4cm、残存器高9.7cmをはかる。外面はハケメ、内面はヘラケズリを施す。胎土には長石などが含まれる。3は壺の口縁片で、内外面とも二次焼成を受けて、器面が著しく傷んでいる。住居跡南西部3～4層中からの出土。4～6は壺の把手である。把手は壺の器壁にナデ付けるタイプのものと、壺の器壁を割り貫いて挿入するタイプのもの両方が出土しているので、残りが良いものを図化した。4は3～4層中、5は住居跡南東部の屋内周溝から、6は住居跡西側の屋内周溝から出土している。7は底部内面が磨滅しているが、欠損ではなく、壺の孔部分だと考えられる。底部付近を欠くのみのほぼ完形で、口径は17.6cm、器高13.1cmをはかり、黄橙褐色を呈する。内外面とも磨滅しており調整はわからない。柱穴（P1）からの出土。8と11は住居跡北西部の5層中から出土し、胎土や色調が類似していることから、同一個体と考えられるが胴部付近の破片がなく接合できなかつた。8は口径15.6cmで、外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。9は甕の口縁片で若干内凹する。住居跡南東部の8層中からの出土。10は口縁片で若干内凹する。12は直立気味に外凹しており、壺の可能性もある。13・14は甕の口縁片で内面にヘラケズリを施す。15・16・18は甕の破片であるが、内外面ともに磨滅しており調整はわからない。17は甕の頭部で内面にヘラケズリ、外面にハケメを施す。19は丸底の小型甕の底部と考える。内面にヘラケズリ、外面にハケメを施す。住居跡南西部の床面からの出土。20は平底状の底部で、底部周辺を指で押圧しており指頭痕が残る。また、底部外面には葉脈状のヘラ描きがみられる。21は壺の肩部片である。内外面とも磨滅しており、調整は不明。22は壺の肩部付近である。内面には粗い粘土接合痕が残っており、ナデ調整のみが施されたとみられる。住居跡北西部3～4層中からの出土。外面は横方向の暗文が残

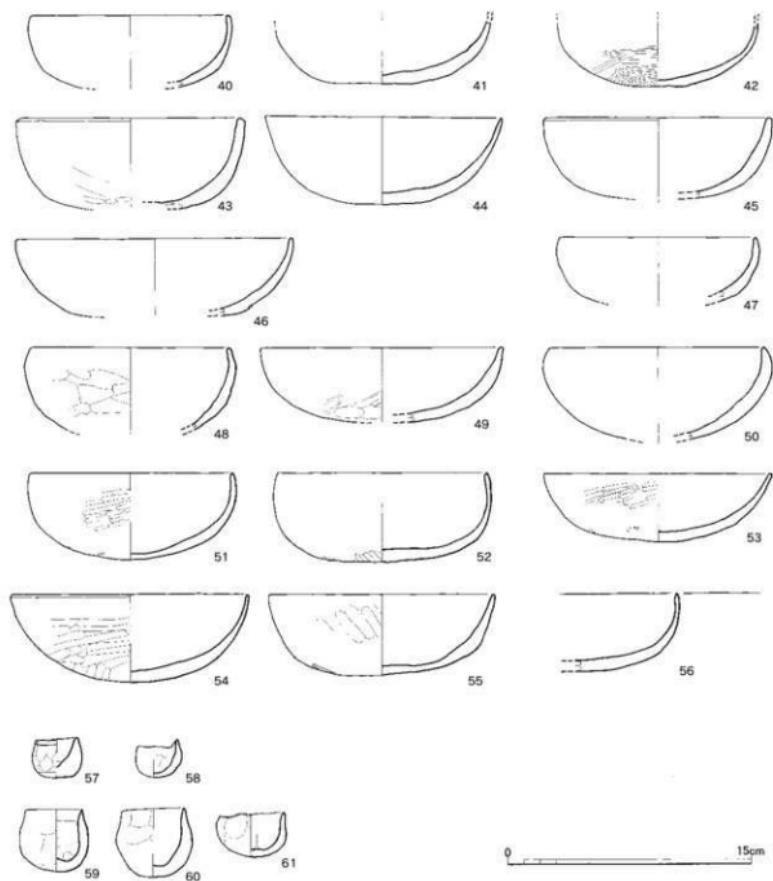


第7図 1号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)



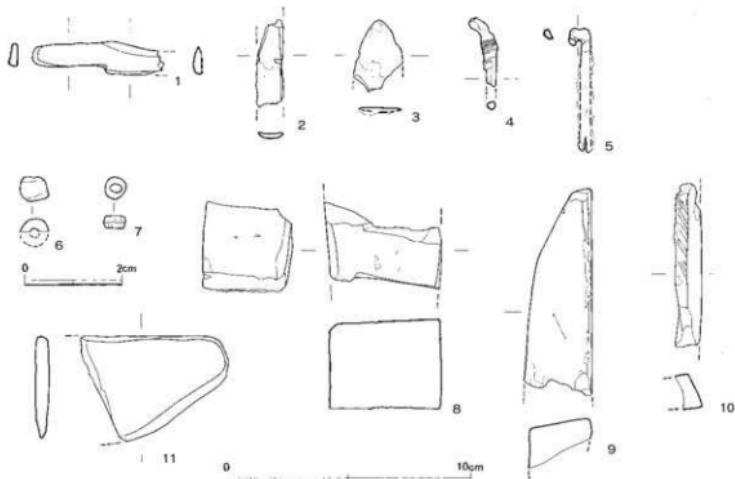
第8図 1号竪穴住居跡出土土師器実測図② (1/3)

り、全体が丁寧なヘラミガキが施されている。住居跡北東部の3~4層中の出土。23は縁の完形品で、屋内周溝の南西部コーナー付近で、口縁部が上を向いた状態で出土した。口径5.6cm、器高8.7cm、胴部最大径9.0cmをはかり、口径に比し胴部最大径が横長である。胴部中位に穿孔を1つ設け、頭部には縦方向のヘラミガキ、胴部には横方向のヘラミガキを施す。底部付近にはミガキは見られずナテ調整のままである。胎土は砂粒を含まない精緻な粘土で、焼成はよく、色調は橙褐色を呈する。24は小型の丸底甌で、ほぼ完形である。外面にはハケメが残っているが、内面は磨滅しており調整はわからない。5層からの出土。25は高杯の口縁部片である。小片のため口径などは復元でき



第9図 1号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)

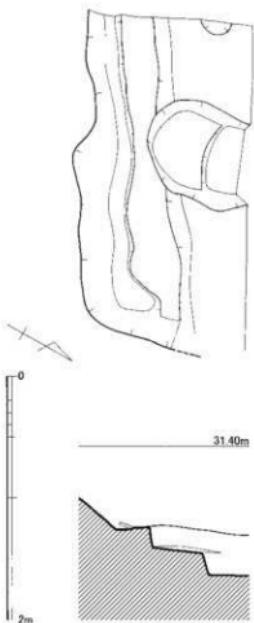
ない。5層中からの出土。26は高杯の脚部で、脚幅復元径は8.6cmをはかる。27は高杯の口縁部片で端部が外反し、外面にハケメが残る。28は高杯の口縁部片で、磨滅しており調整はわからない。29は大きく外反する高杯の口縁部片で、復元口径で18.0cmをはかる。外面にハケメが残る。竈の袖部粘土を除去した際に床面から出土した。30は平底鉢の完形品である。口径18.3cm、器高7.0cm、底部径6.5cmをはかる。外面はハケメを施し、内面は上半に横方向のケズリが、下半にナデが施されている。口唇部は若干外反し、底部もやや上げ底になっている。色調や胎土は他の土師器と大差ない。31は小型の壺あるいは鉢である。平底で、内面はナデ上げられている。弥生土器が混入したものか。32は丸底壺の完形品である。口径10.2cm、器高8.0cmをはかる。外面は磨滅のため調整はわからないが、内面は板状工具でナデされている。住居跡東壁から屋内周溝に流れ込んだ状態で出土した一群に含まれていた。33は杯の完形品である。口径は9.2cm、器高4.5cmをはかる平底である。底部付近は指で押圧しており、指痕が残り、底部外面には葉脈状のヘラ書きがみられる。34～56は椀である。いずれも黄橙褐色を呈し、砂粒を含まない精緻な胎土である。35・36・48・49・51・52～55は外面にヘラケズリを施し、42は粗いハケメを施している。内面はいずれも丁寧なナデ調整が施されている。47～49は竈の袖を除去した際に、43は柱穴（P5）から、44は柱穴（P6）の床面で口縁部が上を向いた状態で、50は住居跡北東部の8層中から出土した。57～61は手握のミニチュア土器である。57は住居跡南西部の3～4層中、58は5層中、59は住居跡北西部の3～4層中、60～61は竈袖部の粘土を除去すると出土した。



第10図 1号竪穴住居跡出土 鉄製品・玉類・石製品実測図 (1/2・1/1)

c 鉄製品・玉類・石製品 (図版9、第10図)

1は刀子で、茎部幅0.95cm、刃部幅1.15cmをかる。住居跡南西部5層中から出土。2は鉈片で、最大幅1.1cmをかる。住居跡南東部1層中からの出土。3は鉄鎌である。扁平で、最大幅1.95cmをかる。住居跡北西部3~4層中からの出土。4は断面が方形に近く、木質が付着していることから釘の可能性が考えられる。最大幅で4mmほどをはかり、住居跡南西部5層中からの出土。5は完形品とみられ、鉤状に曲っている。全長5.1cm、断面形は五角形の不明鉄製品である。住居跡南東部1層中からの出土。6はガラス製小玉で、半分に割れている。スカイブルーを呈しており、分析は行なっていないがソーダ石灰ガラスとみられる。内面に気泡がみられることから、引き延ばし技法によって製作されたと考えられる。直径6mm、最大厚5mmをかる。住居跡北西部3~4層中からの出土。7は滑石製臼玉である。直径4mm、厚さ2.5mmをかる。側面部にはタテ方向の擦過痕がみられる。竈西側部分の屋内周溝から出土した。8~10は砥石で、石材は凝灰岩かと思われる。9と10は石材が似ているので同一個体かもしれないが、接合はしない。破損面以外は砥面として利用されている。大きな凹凸はない。11は粘板岩とみられ、石庖丁にも類似するが穿孔などはみられず、不明石製品としておく。



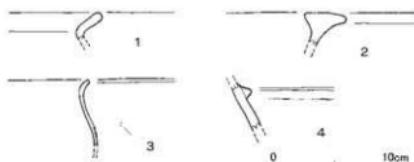
第11図 2号竪穴住居跡実測図 (1/40)

② 2号竪穴住居跡 (第11図)

調査区の北西隅で包含層を掘削中に検出した。斜面をテラス状に削りだした竪穴状の遺構であるが、ここでは住居跡として報告しておく。東西約2.7mを検出した。土壤はこの住居跡を切っていなかったので、同時期に存在したと考える。

出土遺物 (第12図)

この住居から弥生土器が多く出土したが、図示できるのは、2点である。3は甕の口縁片、4は胴部突帯片である。



第12図 2号竪穴住居跡・土坑出土遺物実測図 (1/4)

③ 3号竪穴住居跡 (第13図)

北へ傾斜する斜面部で検出した。斜面をテラス状に割りだした竪穴状の遺構であるが、ここでは住居跡として報告しておく。東西約2.7mを検出した。遺物はあまり出土しなかつたが、床面で弥生土器の裏剥部片が出土したので、弥生時代の遺構だと考えておく。

④ 包含層 (図版7、第14図)

調査対象地は斜面にテラス状の平坦面を造成し、盛土がされていた。調査時には造成時の盛土までを重機で除去し、その後、人力で掘削を行なった。なお、当地の北側付近では、広形銅矛が一括埋納されていた岡本ノ辻遺跡が所在するため、遺構検出時には埋納孔を念頭において作業にあたったが、それらしき遺構は確認できなかつた。

層は9層に分層した。どの層も地山ブロックなどを含んでおらず、南から北に緩やかに傾斜していることから自然堆積とみられる。1～3層には弥生土器・土師器・須恵器・古瓦などが含まれ、4～9層は弥生時代中期～後期の土器だけしか含まれていなかつた。

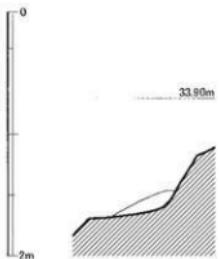
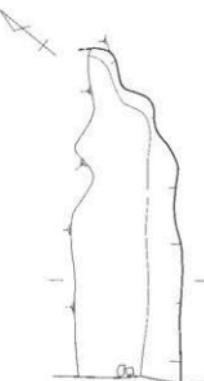
なお、斜面と頂部が地形変換するあたりで木の根を除去するときに、鋳型が1点出土した。

出土遺物

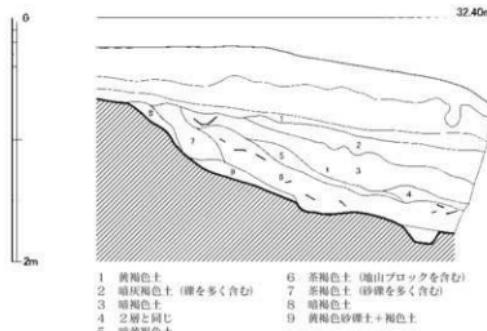
a 弥生土器 (図版10、第15～17図)

1～53は甌、54～61は壺、62は高杯、63・64は鉢、65～69は器台である。

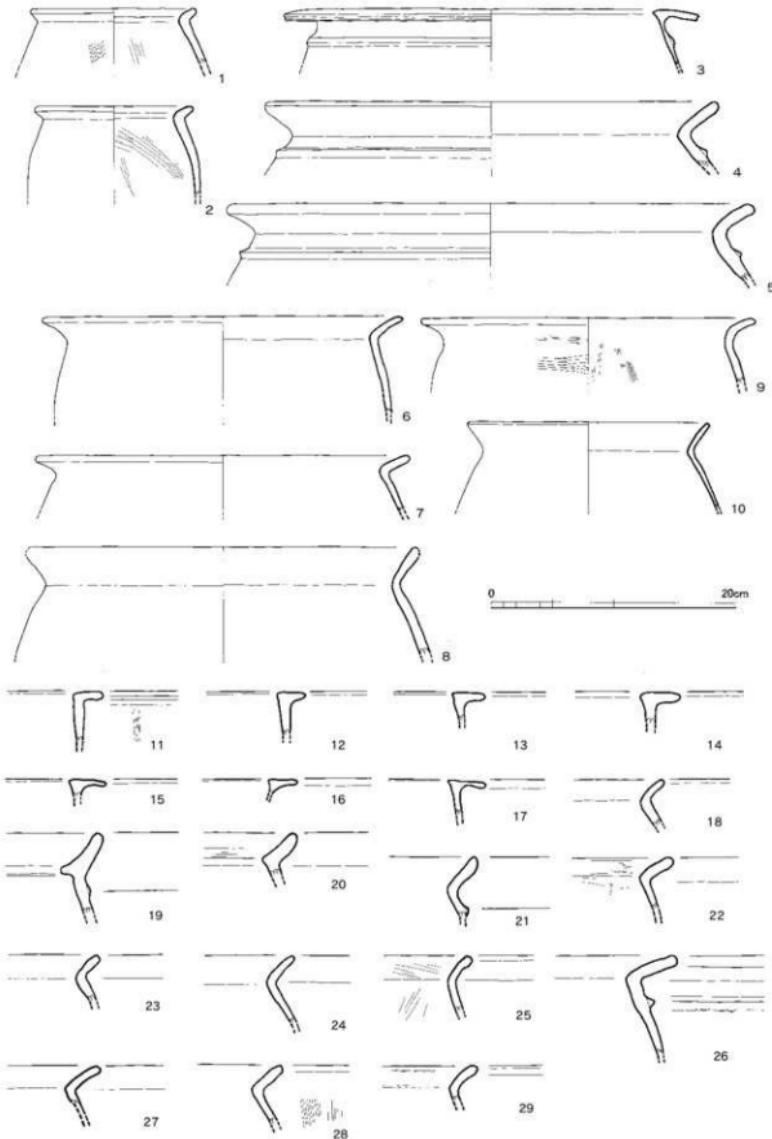
1は復元口径13.6cm、2は復元口径13.0cmの小型甌である。3は復元口径33.9cmをかり、器壁は著しく磨滅しており、突帯も本来の形状をとどめていない。



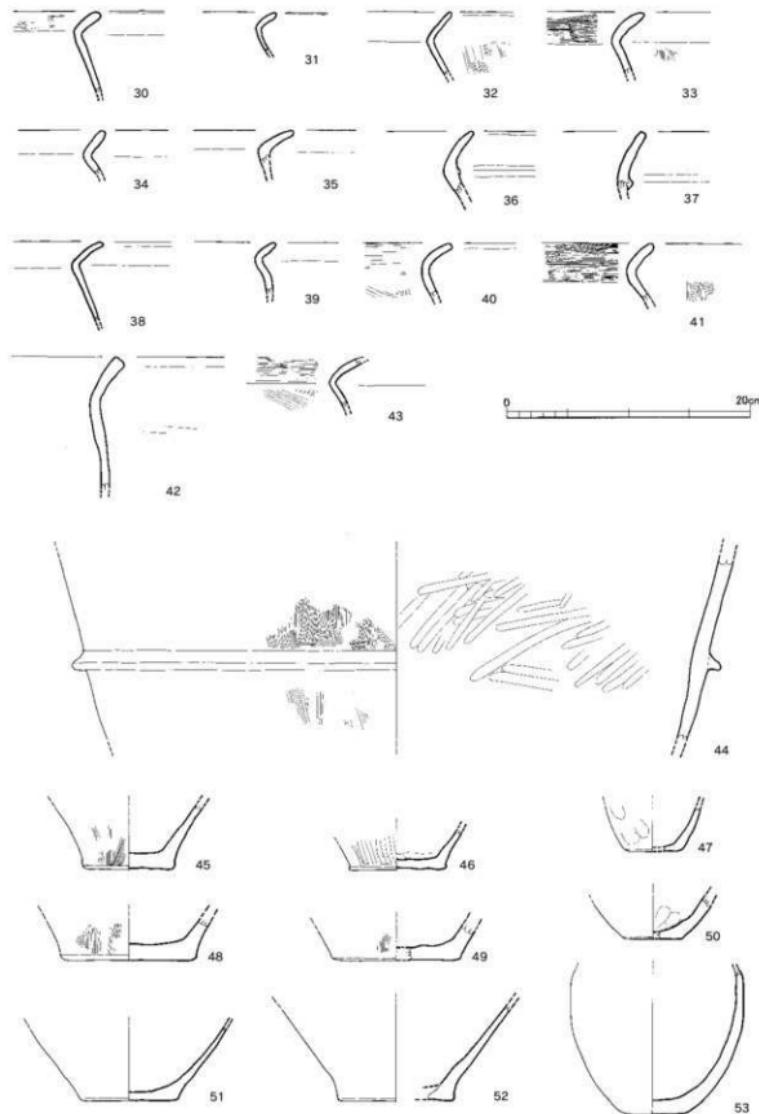
第13図 3号竪穴住居跡実測図 (1/40)



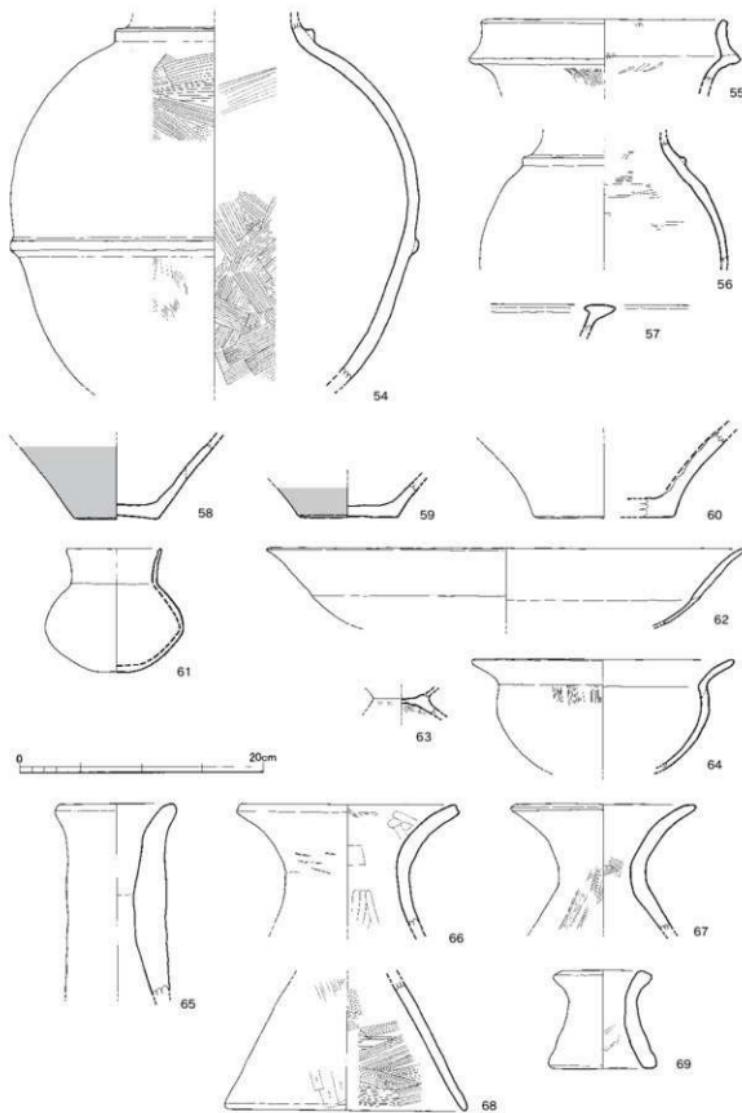
第14図 調査区西壁土層実測図 (1/40)



第15図 包含層出土弥生土器実測図① (1/4)



第16図 包含層出土弥生土器実測図② (1/4)

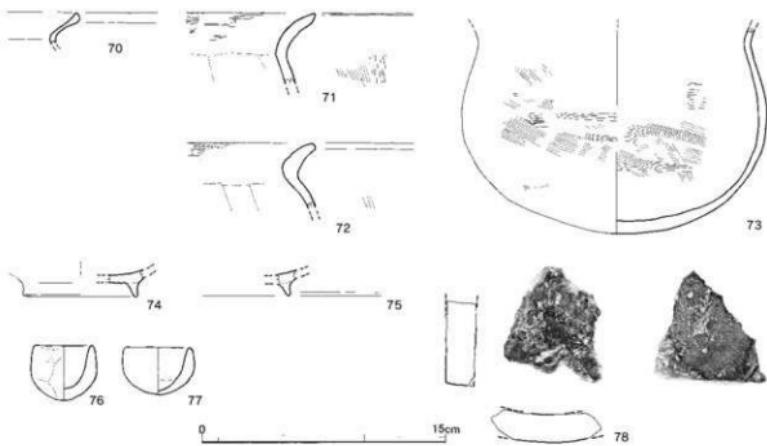


第17図 包含層出土弥生土器実測図③ (1/4)

4は復元口径37.2cmをはかり、調整は磨滅が著しく不明である。5は復元口径43.0cmをはかり、器面は磨滅しており調整はわからない。6は復元口径29.5cmをはかり、調整は磨滅が著しく不明である。7は復元口径30.6cmをはかり、調整は磨滅が著しく不明である。8は口唇部が剥離し、復元口径で32.2cm前後をはかる。9は復元口径27.4cmをはかり、内外面にハケメ、口縁部にナデ調整を施す。10は復元口径19.8cmをはかり、調整は磨滅が著しく不明である。11から43までは甕の口縁片で、弥生時代中期中頃から後期後半までのものを含む。44は甕胴部片で最大径53.2cmをはかる。外面はハケメ、内面はヘラケズリのように器壁を薄くする調整を行っている。45は底部径7.6cmをはかり、外面はハケメ、内面はナデ調整を施す。底部付近に黒斑が見られる。46は底部径8.0cmをはかり、外面に粗いハケメ、内面にナデ調整を施す。47は外面に指頭痕を多く残すもので、底部復元径4.8cmをはかる。底部付近に黒斑を残す。48は復元底部径11.2cmをはかり、外面にハケメ、内面にナデ調整を施す。49は復元底部径で10.6cmをはかり、外面はハケメを施す。50は小型甕の底部とみられ、復元口径5.2cmをはかる。外面は磨滅のため調整はわからないが、内面には指頭痕が残る。51は底部径9.55cmをはかり、調整は磨滅が著しく不明である。52は復元口径9.6cmをはかる。調整は磨滅が著しく不明である。53は口縁部付近を欠いているとみられる破片である。底部復元径5.4cm、残存器高11.9cmをはかる。色調は外面が茶褐色を、内面が淡茶褐色を呈する。調整は磨滅が著しく不明である。54は口縁と底部を欠く壺の破片である。胸部と頸部にそれぞれ1条の突帯をめぐらせる。55は複合口縁壺の口縁部片で復元口径20.2cmをはかる。56は頸部に1条の突帯をめぐらせる。内面にハケメはみられるが、外面は磨滅しており調整はわからない。57は壺の口縁と考えた。磨滅しており丹塗の痕跡はわからなかった。58はやや上げ底となった壺の底部片である。底部復元径6.8cmをはかり、外面には丹塗の痕跡がみられる。59は壺の底部片で底部径7.9cmをはかり、外面に丹塗の痕跡がみられる。60は壺の底部片で、内面の剥離が著しい。復元底部径11.0cmをはかり、内外面ともナデ調整を施す。61は完形の小形壺で、明確な底部がほぼなくなっている。頸部は直立し、口縁は外反する。口径8.4cm、器高10.1cmをはかる。器面の風化が著しく調整はわからない。62は高杯の破片で、復元口径39.1cmをはかる。外面に黒斑がみられる。63は小形の脚付土器片とみられる。64は鉢で、復元口径21.6cmをはかる。外面にハケメが施される。65は器台片で、復元口径10.0cmをはかる。色調は淡黄橙褐色を呈しており、二次焼成を受けた感はない。66は器台片で、復元口径17.6cmをはかる。外面はタテ方向のハケメを施した後にナデ消しており、内面はナデ調整が施されている。67は器台で、口径15.2cmをはかる。内外面ともハケメを施す。68は器台の裾部片で、復元裾部径19.4cmをはかる。外面は磨滅しているものの、かすかにハケメがみられる。内面は横方向のハケメが施される。69は小形の器台片で、復元口径8.1cm、復元裾部径8.9cm、器高8.0cmをはかる。器面は磨滅しており調整は不明。

b 土師器・瓦 (図版10、第18図)

70は庄内系甕とみられる口縁片である。内外面ともナデ調整を施し、黄橙褐色を呈する。71・72は甕の口縁片で、胴部内面はヘラケズリ、外面はハケメを施す。73は口縁端部が欠損するものの、



第18図 包含層出土土師器・瓦実測図 (1/3)

ほぼ完形の丸底壺である。内外面ともハケメを施し、底部付近はヘラケズリを施す。74・75は楕で、74は3層、75は2層から出土している。76・77は手捏土器の破片で図上復元している。丘陵上で出土。

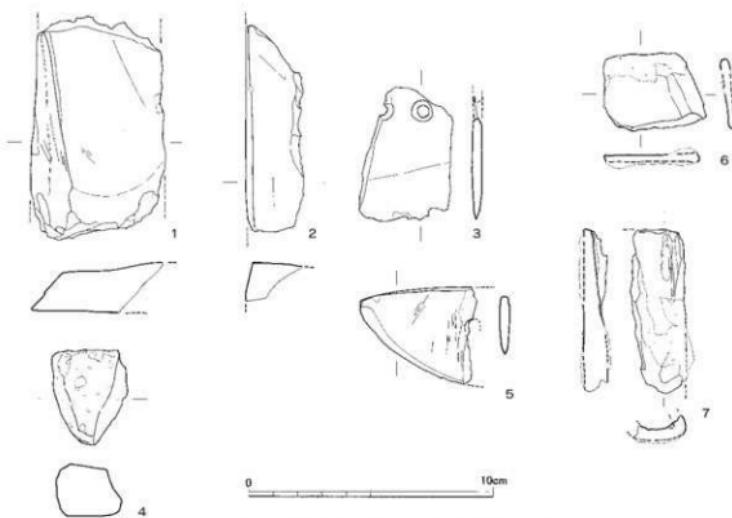
78は凹面に細かい布目を残す平瓦で、凸面は磨滅しており叩きは不明である。1層から出土。

c 石製品・鉄製品 (図版10、第19図)

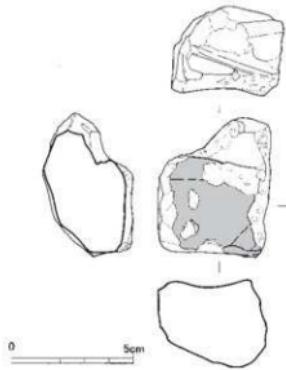
1は磁石で、凝灰岩製か。3面を磁面として利用している。最大幅5.5cm、最大厚2.1cmをはかる。2層中からの出土。2は磁石で、凝灰岩製か。2面を底面として利用している。2層中からの出土。3は石庖丁片で脊部を欠く。穿孔は両側から施されている。4は軽石で、最大幅3.1cm、最大厚2.15cmをはかる。1層中からの出土。5は立岩産とみられる凝灰岩製の石庖丁である。孔の部分は平面で確認できる程度しか残っておらず、両面から穿孔を行ったのか否か判断できない。斜面部からの出土。6は鉄板片である。厚さが3mm程度で、製品なのか素材なのかわからない。2層中からの出土。7は袋状鉄斧である。刃部は残っておらず、袋部も欠損している。袋部内には木質が残っており、袋部の厚さは3mmをはかる。丘陵上で出土したので共伴土器はわからない。

d 石製鋳型 (図版11、第20図)

石英一長石斑岩製で、A面が注湯のため変色しており、鋳型として使用されていたことがわかる。最大幅4.3cm、最大厚3.5cmをはかる。B面は再加工され溝状の窪みができるが、この面に黒変部分は見られないので、鋳型として彫りこまれたのではない。



第19図 包含層出土石製品・鉄製品実測図 (1/2)



第20図 包含層出土石製鋳型実測図 (1/2)

IV まとめ

1 1号竪穴住居跡について

① 時期について

遺物は覆土、柱穴、屋内周溝、貼床下層に分けて取り上げたが、土師器からみた場合、大きな時期差は見出しづらい。須恵器（陶質土器）は第2層でのみ出土しており、小田富士雄氏の編年でいうⅠ-Ⅲ期（TK208併行）で、この時期が住居埋没の下限だと考える。床面に近いレベルでは須恵器が出土していないことから、出土遺物に時間幅があるのかもしれないが、土層観察や遺物の出土状態からみて時期差があるとは言えず、出土遺物の一括性は高い。ただし、柱穴は貼床面と貼床の下層で検出していることから、短い期間内に建替えは行われたとみられる。（境）

② 屋内周溝について

この住居跡で注目されるのは、屋内周溝と竈の関係である。屋内周溝は、住居壁に沿ってほぼ全周しており、竈の後背部にも続く。そのため竈は西側中央部の壁からやや離れた位置に造りつけてある。竈後背部の屋内周溝と竈には連続して焼土が観察でき、加えて平面精査と土層観察で竈と屋内周溝の切り合い関係は認められなかった。これらを勘案すると、屋内周溝と竈は連結していたと考えられる。また、住居壁面に煙道が設けられていないこと、屋内周溝内に炭化物が少なからず含まれていたこと、部分的に屋内周溝に沿って粘土塊が散在していたことから、屋内周溝に煙道機能を持たせた可能性が考えられる。

類例を当たると、屋内周溝（煙道）を全周させ、周溝内に焼土・炭化物を含み、竈の焼上面が屋内周溝と直接連結している、6世紀後半の福岡市梅林遺跡2・3次調査の住居群が相当する。ただ、2次調査SC02の壁面が焼け、屋内周溝内に炭化物が大量に残存する状況や、SC03の煙出しを住居跡隅から外へ出すような状況は、当住居跡には見られない。

また、6世紀前半の福津市奴山伏原遺跡SC112など、各地で散見されるL字型竈は、住居跡の壁面沿いに煙道が広がることなど、当住居跡と共通点が多い。しかし、屋内周溝とL字型の煙道は連結しない例が多く、なお検討を要する。

これらを勘案すると、当住居跡で屋内周溝の一部を煙道として使用した可能性が考えられ、オンドルやL字型竈のような暖房施設的性格が想定できるのではないだろうか。（吉田）

③ 出土遺物について

当住居跡から出土した遺物のうち注目されるのは、須恵器（あるいは陶質土器）の杯身1点（第6図-2）、土師器の甕1点（第8図-23）・鉢1点（第8図-30）・壺底部片1点（第8図-20）・椀1点（第8図-33）である。

杯身（第6図-2）：口縁端部が横ナデによって丸く仕上げられ、受け部は摘み出したようなわずかな段で、外面の調整も基本的に横ナデ、部分的に手持ちヘラケズリが施されている。こうした特徴の杯身は小田編年I-B（TK208併行）期の資料中に見出せない。また、時期的に先行する朝倉古窯跡群^(注1)などの資料中でも類例は見出せず、系譜的に国内で祖形が辿れない。

本例を実見した武末純一氏、亀田修一氏、桃崎祐輔氏から、上述のような特徴をもつものは、須恵器ではなく朝鮮半島西部、すなわち百濟地域の陶質土器ではないかとご指摘いただいた。そこで、朝鮮半島に類例を求めたところ、清州新鳳洞古墳群1号墳^(注2)、靈岩万樹里古墳群2号墳^(注3)、昌原遷善洞古墳群12号石槨墓^(注4)で類似した器形がみられる。

さて、これらの陶質土器と、本例を比較してみると、①口縁端部に段や凹部がない②受け部が摘み出して作られたような形状を呈している③立ち上がりが器高に比し長くない④外面に回転ヘラケズリを施していない⑤底部が比較的平底に近い、という共通点がみられる。ただし、口径は半島例が12.5cm前後であるのにに対し、本例は11.6cmと一回り小さく、焼成が陶質土器のように堅緻でなく、還元されてはいるが軟質であるという3点が異なる。以上のことを勘案し、この土器は器形などの諸特徴から、陶質土器の系譜に位置付けられるとしておくが、焼成が著しく悪いものが陶質土器にあるのか否かが課題として残る。

上述の杯身が陶質土器の系譜にあるとした場合、もう1つ気になるのが、器台（第6図-5）である。I-B（TK208併行）期の器台は、一般的に杯の胴部が丸味を帯びて深くなるのに対し、これは胴部が直線的で浅い杯部に復元されそうであり、同時期前後の器台とはプロポーションが異なる。場合によっては伽耶地方の陶質土器である可能性もある。

第8図-30：次に土師器であるが、5世紀代は器種を問わず基本的に丸底が多い。しかし、第8図-30の鉢や第8図-33の杯は平底を呈している。鉢と同様の器形をなすものを北部九州で探したが、類似するものを管見に入れることができなかった。そこで、朝鮮半島で探したところ、第21図-5に示したような益山間村遺跡2号土坑出土の軟質土器に類品を見つけ出した。底部はやや上げ底になっているが、平底で口縁は外反しておりプロポーション的には最も近い。ただ、第8図-30は外面をハケメで調整しており、日本の色彩が強い。船載か否かは別として、系譜を半島に求めたい。

第8図-33：平底である点、底部付近はハケメでなく指押さえで調整している点などが、この住居跡から出土した土師器と異なる。また、底部には葉脈状のヘラ描きを施しており、同様の調整は壺の底部とみられる第8図-20にもみられる。葉脈状のヘラ描きは百濟地方の軟質土器に類例があると

いうことから^(注5)、半島に系譜が求められるのではないだろうか。

第8図-23：完形品で作りが丁寧で、須恵器あるいは陶質土器の趣を正確に模倣したものと考えられる。胴部は扁平なプロポーションで、口径が5.6cmと胴部径に比して小さく、口縁端部を外側に摘み出しており、頸部も縮まっている。この時期の須恵器趣と比較すると、口径と胴部径の比率が異なり、須恵器に類例を求めるることは難しい。うきは市塚堂遺跡9号住居^(注6)から出土した趣は陶質土器であるが、胴部の扁平具合や口縁端部を摘み出している点など共通点が多い。おそらくこうした趣を模倣したものではないだろうか。(境)

注1 平田定幸 1984 「朝倉の初期須恵器窯跡」(『廿本市史』資料編)

九州大学考古学研究室 1989 「山隈古窯跡群の調査」(『九州考古学』63号)

注2 忠北大学博物館 1990 「新鳳洞百濟古墳群発掘調査報告書-1990年度調査-」

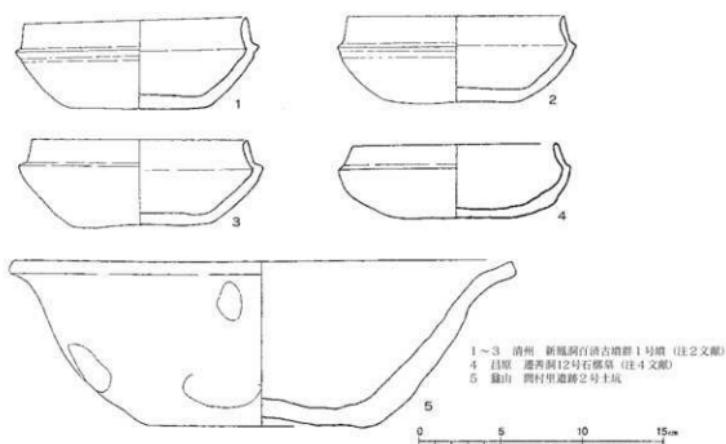
注3 光州国立博物館 1984 「靈岩萬樹里古墳群」光州国立博物館学術叢書3冊

注4 定森秀夫氏は下記論考中で伽耶地域出土の百濟系土器としている。

定森秀夫 2006 「百濟土器と加耶土器の併行関係」(東アジア考古学会『第18回東アジア古代史・考古学研究交流会予稿集』)

注5 武末純一氏のご教示

注6 福岡県教育委員会 1984 「塚堂遺跡IV」浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集



第21図 朝鮮半島出土百濟系陶質土器・軟質土器 (1/3)

④ 窯祭祀について

窯の袖部下から、手捏土器が2個出土し、窯築造時の祭祀である可能性が考えられる。5世紀前半の塚堂遺跡D地区6A住居跡、赤井手遺跡43号住居跡などでも同様の祭祀がみられ、6世紀代の窯祭祀と異なり土製模造品が伴っていない。特に、春日丘陵上に立地し、時期的にも近い赤井手遺跡43号住居跡で、類似した祭祀が看取される点は興味深い。(吉田)

⑤ 小 結

以上、1号住居跡の遺構・遺物に関して所見を述べてみた。竈は住居壁面に煙道を設けておらず、逆に竈背面の屋内周溝内に焼土が含まれ、竈と屋内周溝の切り合い関係は認められなかったことから、竈と屋内周溝は連結していたとみられる。その機能であるが、屋内周溝の中に炭化物が少なからず含まれていたりしていたことや、竈が屋内周溝より内側に設けられ、6世紀代のオンドル状遺構やL字形竈と共に通するオンドル的な遺構であった可能性もあるが、屋内周溝の土層観察からはトンネルが埋没したり、円筒状のものがあったりしたような痕跡は明確に確認することができなかつた。ただし、部分的ではあるが屋内周溝に沿って粘土塊が散在しており、オンドルとすれば蓋の目張りである可能性もある。

陶質土器系須恵器や軟質土器系土師器など、朝鮮半島系の遺物がセットとして出土していることから、屋内周溝がオンドル的な機能をもっていたとしても不思議ではない。未報告だが、同じ春日丘陵上の竹ヶ本C遺跡P88から断面台形の鉄斧が1点完形で出土しており、韓国側では5世紀代に比定されるものである。春日丘陵上も5世紀段階の半島系文物が散在しており、当住居跡もこうした渡来文化の一環として理解してはどうかと考える。(境)

2 鑄型について

斜面部の木の根を除去した際に出土したので、正確な時期はわからないが、石英一長石斑岩製であることから、弥生時代の青銅器鑄型だと判断した。A面以外は二次加工によって、本来の面を留めていない。A面は凹面をなしており、製品でこうした曲面をなし、無文であるのは、小銅鋒か銅矛の袋部であるが、小銅鋒としては曲面が扁平過ぎる。よって、銅矛の袋部ではないかと考える。A面で生きている部分の幅が3.2cmであることと、曲面の扁平具合からみて中広形銅矛か広形銅矛のいづれかに、そして、縱断面の形状からみて、袋部でもハバキに近い部分ではないかと考える。(境)

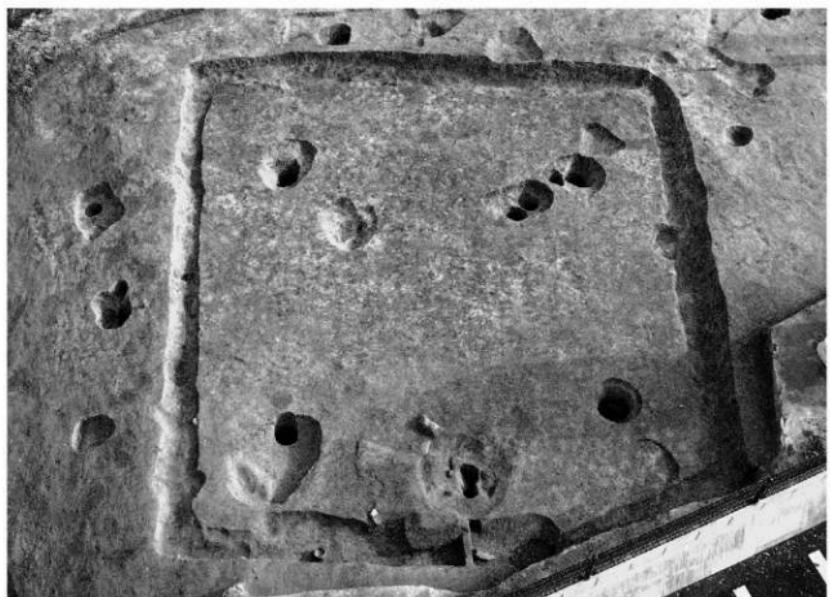
図 版



(1) 調査区北半（西より）



(2) 調査区南半



(1) 1号竪穴住居跡完掘状態（西より）



(2) 1号竪穴住居跡主柱穴位置関係（西より）



(1) 1号竪穴住居跡竪椗出状態（東より）



(2) 1号竪穴住居跡竪袖半裁状態（北より）



(3) 1号竪穴住居跡竪袖除去後の遺物出土状態

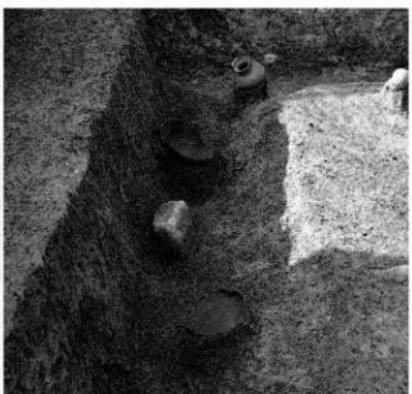
図版4



(1) 1号竪穴住居跡P6土器出土状態（西より）



(2) 建出土状態（東より）



(3) 1号竪穴住居跡西側屋内周溝遺物出土状態（東より）



(4) 須恵器（陶質土器）出土状態（東より）



(1) 1号竪穴住居跡東側土器出土状態（西より）



(2) 1号竪穴住居跡東側土器出土状態（北西より）

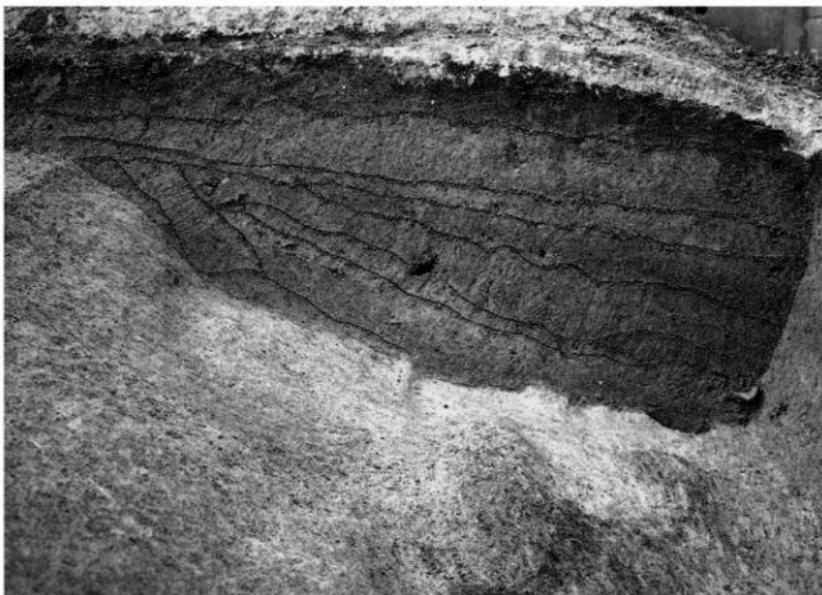
図版6



(1) 1号竖穴住居跡竪西側土層①（北より）



(2) 1号竖穴住居跡竪西側土層②（北より）

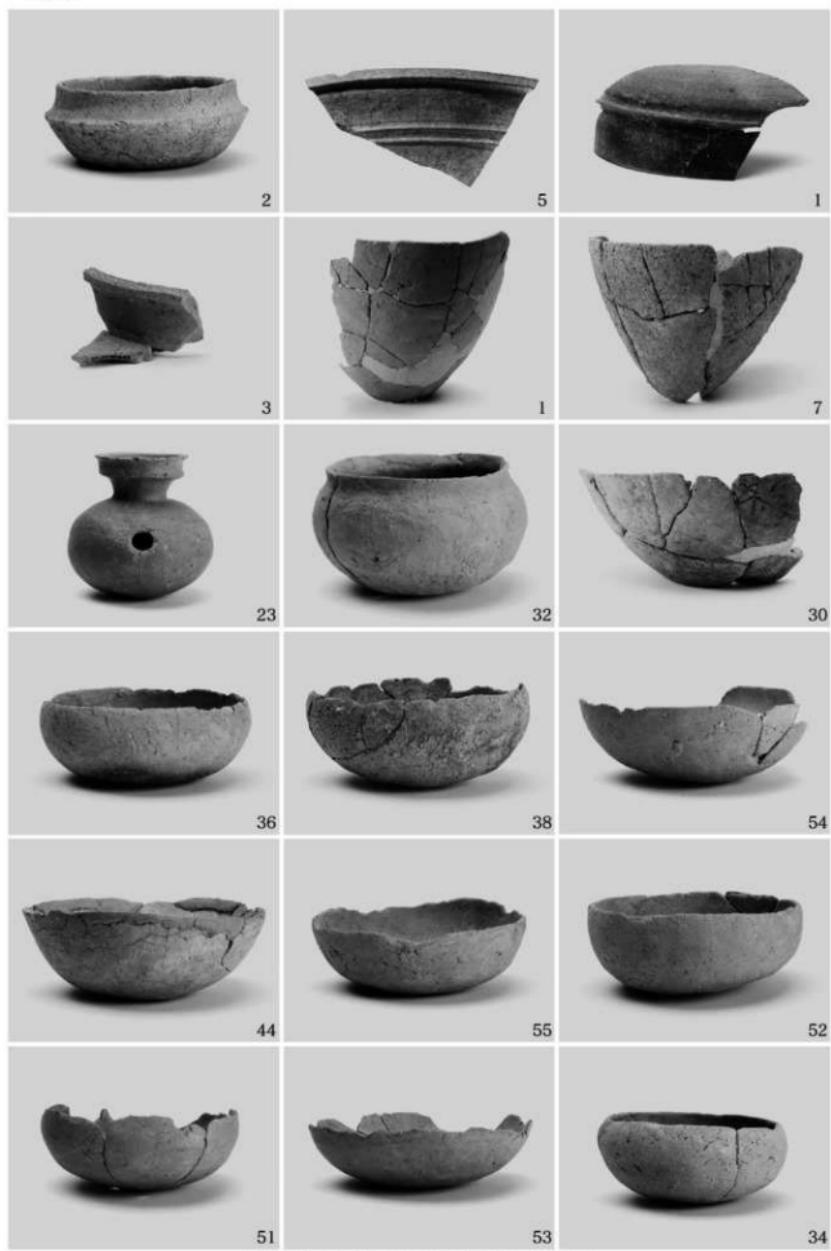


(1) 調査区西壁土層（東より）

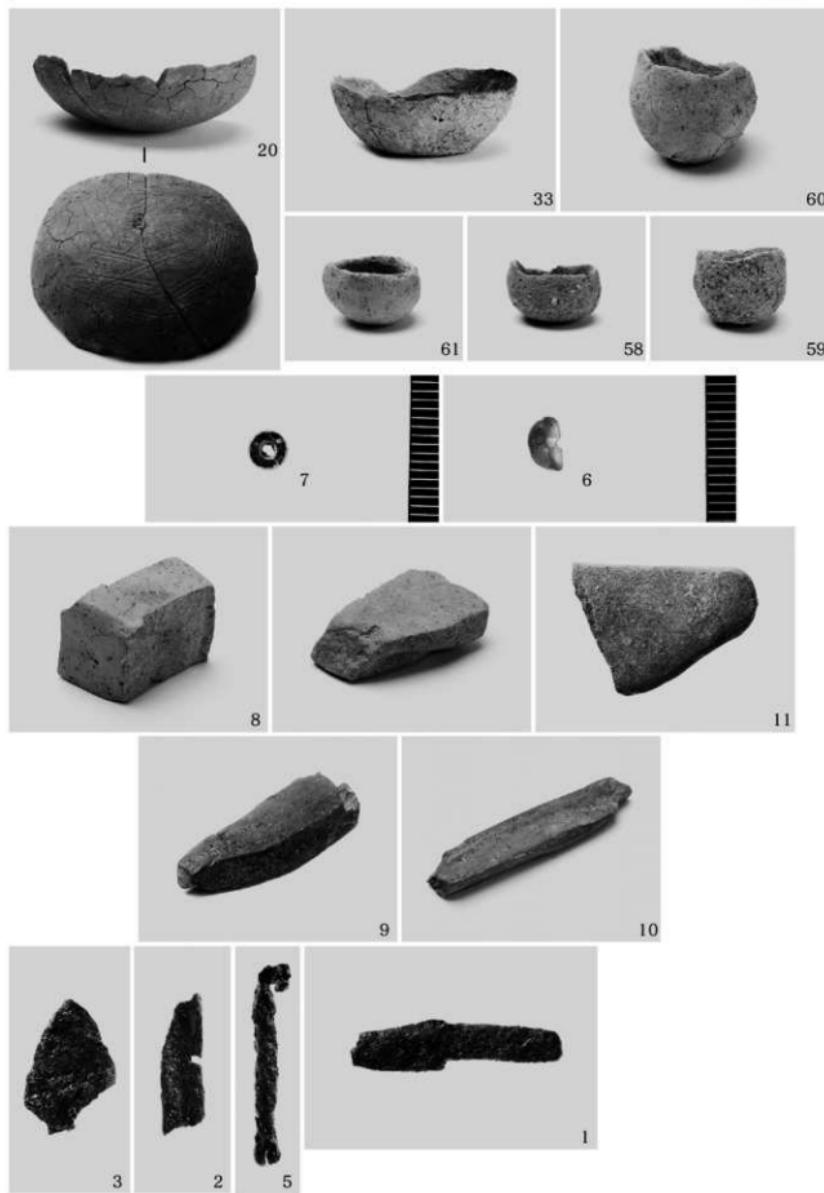


(2) 包含層 土器群A・B出土状態

図版8

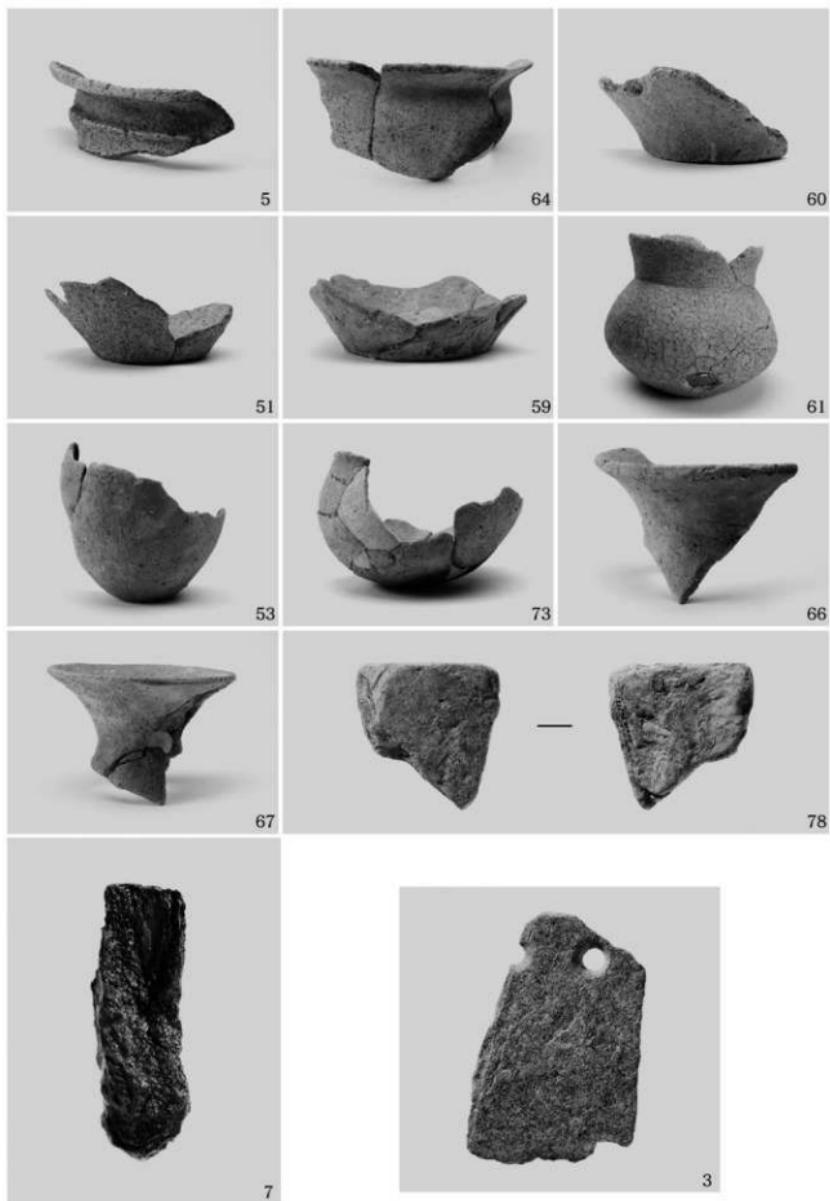


1号竪穴住居跡出土須恵器（陶質土器）・土師器

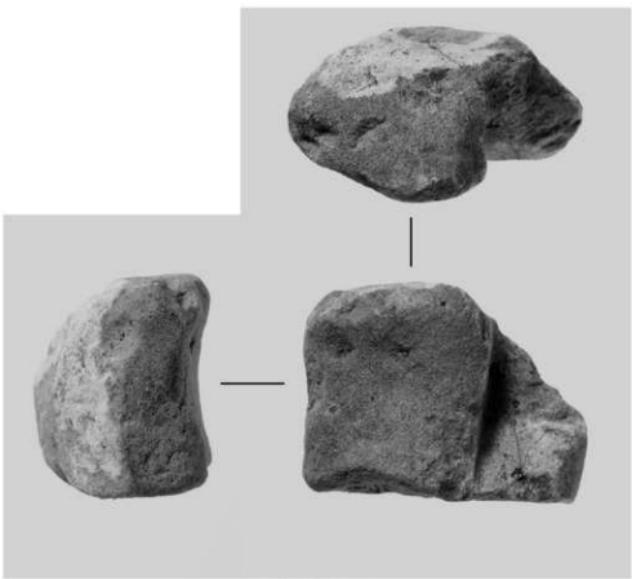


1号竪穴住居跡出土土師器・手捏土器・鉄製品・玉類・石製品

図版10



包含層出土弥生土器・鉄製品・瓦・石製品



包含層出土鑄型

報 告 書 抄 錄

柚ノ木 A 遺跡
2次調査

春日市文化財調査報告書
第 50 集

平成19年3月31日

発 行 春日市教育委員会
福岡県春日市原町3 丁目1番地5
印 刷 株式会社 三 光
佐賀県伊万里市大坪町乙4161-1